

【序論】

研究動機・研究目的・研究方法

現行の小学校学習指導要領の中で、ハンドボールは内容の取り扱いにおいて「ハンドボールなどその他のボール運動を加えて指導することができることとした。」というように示されている。そこで、現在ハンドボールを授業で取り扱ってもよいこととなった。しかし、ハンドボールを教材として扱ってもよいことになってはいるが、ハンドボールはまだまだ小学校のボール運動の教材としては定着していない。著者は、ハンドボールの競技者として毎日のようにハンドボールの楽しさを実感している。また、大学で小学生がハンドボールを楽しんでいる姿を見ることができると多くなり、もっともっと多くの子どもたちにハンドボールを楽しんでほしいという考えが強くなった。そこで、ハンドボールの動きとして限られた時間の中で、ボールの投げ方・受け方・攻守の動き方をどのように指導し、ゲームへと発展させていくのかを研究し、これからの著者の教育活動に生かしたいと感じるようになり、小学校のハンドボール指導の教材づくりについて研究するに至った。

本研究の目的は、教材化、教材づくりという視点から実践事例を分析しながら、ハンドボールの教材価値を明らかにすることである。ボールゲームという単元の名称のように、授業でも最終的にゲームへと発展していく。本研究では、具体的にゲームという教材づくりを検証することで、ハンドボールの教材価値を明らかにする。

平成 15～16 年度 (財) 日本ハンドボール協会選定実践研究推進校である 19 の小学校で実践されたハンドボールの指導の事例を分析しながら、帰納的に検証する。すなわち教材化、教材づくりという視点から、個別指導実践事例を質的に分析する。

【本論】

第一章 小学校におけるボールゲームとしてのハンドボールの構造特性

ボールゲームの特徴と、ハンドボールの構造特性から小学校におけるハンドボールの特徴を考察した。小学校のボールゲームでは、チームの仲間と協力し、相手チームと対決して楽しむという特徴がある。ハンドボールにおいても同じことである。協力して仲良くゲームを楽しむという態度で臨むことで、パスをつないで攻めたり、役割を決めて守ったりするような簡単な連係プレーができる。

第二章 教材とは何か

創意工夫のある授業を展開し、児童一人ひとりに合った授業を実現するためにも、よりよい教材を準備し、活用していかななくてはならない。そこで、教材をつくっていくためには、教材とはいったい何であるのかを考察した。体育科教育における教材とは、「学習内容を習得するための手段であり、その学習内容を習得をめぐる教授＝学習活動の直接の対象となるもの」である。スポーツ種目は教材ではなく「素材」として位置づける。教材づくりとは、狭義の意味での教材研究を意味し、素材・学習内容・教材を区別する立場から見ると、まさに教材研究といえる部分は「何で教えるのか」、つまり、素材としてのスポーツを加工・改変することによって、学習内容を習得するための教材(学習活動の対象)へと組織し直すことにある。

また、小学生の発達段階の考察から、ゲーム教材の系統性を考察した。小学校低学年は、個人の基本的な運動技術を学習する時期である。ハンドボールに必要な基本的な技術としては、ボールを投げる、捕るという運動が中心であると考えられる。よって、ボールの操作が中心となった、正式なゲームを簡易化したゲームを目標に行なわれることが望ましいと考察さ

れる。小学校中学年は、個人の基本的な運動技術をさらに高めていく時期である。低学年の時期にある程度の基本的な機能が身についていると考えられるので、基本的な運動技術のほかに、パスやシュートなどの技能や、1対1、2対2の戦術の習得も可能である。そこで、戦術を習得できるような簡易ゲームや、それを生かせるような、ルールをさらに正式なものに近づけたゲームが目標になると考察される。小学校高学年は、個人の運動技術が身についていると考えられるので、チームでの動きを学習していく時期である。ゲームを行ない、その中で課題を見つけ、チームで克服していくというゲームを中心とした学習ができると考えられる。よって、戦術を生かせるような正式なルール、またはより正式なものに近いルールのゲームが目標となると考察できる。

第三章 小学校におけるハンドボールの教材づくりに関する事例分析

＜日本ハンドボール協会選定実践研究推進校の実践事例から＞

ここで対象とする実践研究推進校とは、「小学校体育科授業におけるハンドボール教材の展開について」というテーマのもと各都道府県協会より推薦された小学校の中から 20 校程度、(財)日本ハンドボール協会学校体育ハンドボール検討委員会により選定された学校である。この推進校の事例をもとに低・中・高学年別に分析をした。

低学年のハンドボール指導(表 1・4)は、簡単なボールの扱い方という技能を身につけること、そしてボールゲームの基礎的な動き方を身につけることに重点を置いた指導が行われていると考えられる。そのような指導を行うために、ハンドボールを簡易化したゲームや、基礎的な技能、動き方を身につけるためのゲームを教材として開発し、使用している。

中学年のハンドボール指導(表 1・3・4)は、運動を組み合わせた動き方を身につけること、戦術につながる動き方を身につけることに重点を置いた指導が行われていると考えられる。さらに加えて、チームで作戦を立て、チームで実行するという戦術学習も行われる。攻める行為と、守る行為において戦術の可能性が生まれる教材づくりがなされている。

高学年のハンドボール指導(表 1・4)では、これまでの個人の動き方の技能のほかに、チーム全体での動き方を重視した指導がなされている。高学年では、より完成されたボールゲームが実践できる可能性を示している。

【結論】

実践事例の分析からハンドボールの教材価値として次のようなことが挙げられる。

- ①ボールを簡単に操作できることで、子どもたちが容易にボールゲームを楽しめること。
- ②ボールを力いっぱい投げることができ、投能力を身につけることができること。
- ③個人戦術、集団戦術の学習が容易にできること。
- ④第 1 学年から第 6 学年まで系統的に指導できること。
- ⑤どの学年の児童も、初心者も楽しめるボールゲームであること。
- ⑥学習内容に応じて多様な教材づくりができること。
- ⑦シュートチャンスが多く、ゴールが大きいと、ゴールを決めるという楽しさを容易に味わうことができること。

ハンドボールは、ボールゲームの特徴である、戦術、協力、対決などの楽しさを味わうことが可能である。よって、ハンドボールは、教材としての価値があると考えられる。

本研究では、推進校の実践事例を分析することでハンドボールの教材価値を明らかにした。しかし、運動を系統的に身につけていくための下位ゲームにおいてはまだ考慮する部分が多い。ハンドボールという競技特性を理解し、児童の運動発達を考慮した教材づくりをしていくことが今後の課題である。

(引用・参考文献省略、資料参照)